基調講演・パネルディスカッション

自転車活用推進法を受けた取組

1．概要

自転車は環境に優しく災害時の移動・輸送や国民の健康増進，交通混雑の緩和などに資するものであることから，我が国において自転車の活用推進に関する施策の充実がより一層重要となっており，平成29年5月1日に自転車活用推進法が施行されたところである。

主に観光における自転車の活用に絞り，屋井鉄雄・東京工業大学副学長による基調講演，産学官の5人によるパネルディスカッションを開催した。

2．屋井教授の基調講演の要旨

従来，道路管理者が実施する自転車施策は交通安全対策が主であったが，自転車活用推進法が施行され，今後は自転車を活用していくための施策が求められている。

自転車活用推進法に定められた14項目の重点施策のうち，本日は「自転車活用した国際交流の促進」，「観光来訪の促進，地域活性化の支援」について取り上げたい。

自転車の特性を活かした観光振興として，サイクルツーリズムの取り組みが，既に地方部を中心とした全国各地で行われており，インバウンド含む観光誘客に効果があるということも分かってきている。

今後さらにこの効果を全国に波及させていくためには，サイクリングルートにおける走行環境の整備，受入環境の整備，魅力づくり，情報発信といった取り組みが重要であると考えられる。

3．パネルディスカッション

コーディネーター

屋井　鉄雄 氏（東京工業大学副学長・教授）

パネリスト

太田　　昇 氏（岡山県真庭市長）
奥田　秀樹 氏（国土交通省道路局参事官室自転車活用推進官）
絹　代　　氏（サイクルライフナビゲーター）
宮本　和宏 氏（滋賀県守山市長）
矢ケ崎紀子 氏（東洋大学准教授）

4．パネルディスカッションの主なやりとり

●取組事例の紹介（滋賀県守山市／岡山県真庭市）

宮本　琵琶湖を自転車で一周することを「ビワイチ」という。日本一の湖を走る爽快感と達成感が売りで，比較的女性や初心者でも走りやすい。このビワイチの拠点として守山を活性化する取り組みを行っている。

まず，しまなみ海道がどのように成功したかを参考に，県知事や台湾の自転車メーカーGIANTの日本法人社長と一緒に琵琶湖を走り，私費で台湾へ視察に行くなどの関係づくりを進めた。そうした中で平成28年3月に，「ジャイアントストアびわ湖守山」がオープンし，平成29年3月には，しまなみ海道の愛媛県今治市と「自転車を通じたまちづくり交流協定」を結んだ。

ビワイチを楽しんでもらう上で必要なのは，安全対策とおもてなし体制である。1日で1周するのは難しいという方のために漁船に自転車を載せて琵琶湖をショートカットできたり，京都からのアクセスバスやエイドステーションとなるサポートカーなどを整備している。国や県，周辺市町と連携しながら，安全・快適に走れる環境や案内も充実していきたい。

太田　中山間地域である真庭市では，自転車で散歩するように地域の景色や歴史などを楽しむという「散走」を活用した観光振興を進めている。民間企業や愛好者などで構成される「真庭・自転車の楽しみ方プラン会議」では，事前に走る場所を企画・検討・試走し，みんなで話をし，自転車で観光名所や沿線の店舗といったコース上の立ち寄り先を訪ねる等，散走の試走会を実施している。また，地域に滞在する外国人が地元住民と一緒に，サイクリングマップの作成やコースの設定などを行っている。

課題としては，まだ市役所が会議をリードしている状況なので，もう少し市民主導の形にもっていきたい。

矢ケ崎　観光振興の中でもサイクリングというテーマ型の取り組みをすると，ここまで地域は強いのかと感激している。両市ともにビジョンをしっかり持っており，市長自らが体験し，楽しさや価値を語ることができるのは素晴らしい。サイクリングは世界的なニーズがあり，すでに立派なマーケットがある。他の地域での日常生活と

いう非日常体験をできる点で，体験型の観光が好まれるようになってきた世界的なニーズに裏打ちされている。

●走行環境の面で何が求められるか

宮本　スピードを出して走る方は，琵琶湖の湖岸堤の自歩道ではなく車道を走るが，車道側は決して安全とは言えない区間もある。そのため，国道では安全対策として矢羽根を付けて頂き，今後，県道にも整備していく予定である。しかし，琵琶湖の西側の国道や県道に自歩道がなく，交通量が多く，迂回ルートがあるものの，琵琶湖が見えないため，豊富な観光資源を活かした新たなルート開発も必要と考えている。台湾では危ない箇所を電車でショートカットしており，琵琶湖でも，近江鉄道のサイクルトレインや本市の漁船タクシーがある。

絹代　環境整備にあたっては「安全」と「迷わないこと」が柱で，矢ケ崎先生のご意見のように，自転車の楽しさや不安などを体験している方が環境を整備するかが重要であると感じる。短い距離ならファミリーがいることを考慮し迷わないことが重要で，長い距離になると地図を読める人も増え，自由に走れる方が良いと思う。

また，ステーションをたくさん作るより，例えば，帰りのフライトまで空港で荷物等を預けられるなどゲートのところでの整備が重要で，自転車で動く人の気持ちになってポイントを絞っていけば，経費を節約しつつ現実的な方法が見つけられるのではないか。

屋井　どうしても安全という課題があるが，都市部とは別の考え方になると思う。琵琶湖で自歩道を使っている写真があったが，都市内と違い沿道施設がなく，通行の目的も近いため，このケースは共存が可能ではないか。

●どうすれば受入環境の確保が進むか

宮本　受入環境確保のキーワードは「連携」で，国や県，周辺市町のほか，民間との連携も大変に重要である。

利用者が安心できるよう，店舗等と連携したポートステーションの拡大を県が進めており，タクシー会社と連携して，いざという時にリタイアできるレスキュー体制も整えている。また，乗客の多くないJRの路線には自転車を載せられるように働きかけていきたいと考えている。

太田　まずは自転車がよいものだということを広く市民の中で合意形成したい。また，ハード面では特にトイレが重要だと思っているが，地元の人の管理などにより，感動してもらえるものにしたい。

行政が一定の問題提起をしながらも，行政主導ではなく，住民の意識を高めていくことになればよい。

矢ケ崎　やはり地域との連携が重要だが，トップが率先して全体コーディネートや応援団づくりを進めていくことが功を奏していく分野なのだと思った。その中でどれだけ受け入れていくのか，キャリングキャパシティについては地域と話していく必要がある。

屋井　ビワイチのマルチな交通モードの取り組みは素晴らしい。ニーズも出てきている。こういうことができるのが，国土交通省ではないか。

奥田　国土交通省としては，まず自転車を使って頂くためのインフラ整備を進めたい。その上で，関係省庁が連携してサイクリング環境の整備を進めていく。

●魅力づくりや情報発信をどうすればよいか

絹代　地元の人が何でもないと思っているものでも，他の土地の人が見ると格別な観光資源ということがある。

また，ブログなどのように，具体的な体験の魅力が伝わる文章や写真・動画などを入れながらうまくウェブを使うと，追体験したいと思うようになる。

矢ケ崎　魅力は相対的なものだが，共通するコアはあるため地域特性を活かしてそこをしっかり作りつつ，例えば台湾人にはフルーツ等，ターゲットごとにバリエーションを持つのがよい。また，しまなみ海道も台湾との連携で世界に進出しているが，誰かの肩を借りてプロモーションするということも含め，国家ブランドとして発信していくことも考えられる。

太田　魅力の創出・向上には外からの目が大事で，地域の歴史・魅力などを自らが学ぶ中で自信を持ってその地域を高めていくことにつながる。外からの目と中からの気付きをうまくつなげていく必要がある。

宮本　外からの目線に加え連携が大事であり，イベントの際にはトップの人に一緒に走るよう呼びかけている。

最後に，警察との連携をうまくできると道路に車が入って来ず一日楽しめるような環境づくりもできる。警察との連携がうまくいくような仕組みも検討して欲しい。

おわりに

本会議の議論なども踏まえ，各地においてより一層効果的な自転車の活用が進むよう，様々な関係者と連携しながら総合的な施策を展開していきたい。

〔 文責：国土交通省道路局参事官付技術係長　後藤 義卓 〕